

## 『和歌初学抄』の書面遷移

## ——項目配置と享受——

梅田 径

## 一 はじめに

歌学書は書写過程において大きな変容や改変が生じる場合が多い。内容的にも、先行する歌学書の記述を引き継ぐ記事も多いため、記述をそのまま著者の思想の直接的な表出と見なすことには慎重にならざるをえない。本稿で扱った藤原清輔や顕昭の時代においてすら、先行歌学書の多くが散逸しており、『奥義抄』にせよ、『袖中抄』にせよ、それらが先行書の記述を引き継いでいる可能性に常に留意する必要がある。しかも院政期初期の歌学書は、『綺語抄』や『和歌童蒙抄』のように歌語辞典や例歌集、歌語注釈書等の様々な側面をもち、著者の「思想」の表出として読みうる物は多くない。

特に清輔の著述には、自身の手によって増補改訂されたと思しい箇所が多数存することを、川上新一郎が指摘している。<sup>★1</sup>このような性格の書物は、様々な増補改訂の段階を反映する伝本が生成され、

さらに後人の加筆や抄出が施された本文が存しているため、著者自身の改定の過程を辿ることは容易ではない。

しかしながら、歌学書が多様な形態の写本を残していることは、享受史的にはむしろ興味深い現象である、書写者や享受者によってどのように利用され、改編されていったのかの軌跡をとどめていると考えられるからだ。このような観点から、現在残された写本の書写面を観察することで諸本の性格を考察したい。それは必ずしも清輔の著述意図を説明することにはならないが、作者の意図や思想を超えて、本文、書写面などが甚だしく変容する性質をもつ書物そのもののあり方を論じることになるからである。

本稿は清輔が著した『和歌初学抄』を、このような問題意識から考察していく。すでに久曾神昇、川瀬一馬、川上新一郎により成立、書誌、伝本など基礎事項が検討されている。小林強、日比野浩信は古筆切を検討しており、渡部泰明、佐藤明浩、田尻嘉信、岩淵匡に

[Article]

UMEDA, Kei

Changes in the Document Interface of the *Waka Shogakushō*:

Placement Entries and their Reception

(Received 18 October 2012)

A Noon of Liberal Arts, No. 4, 2013

より個別項目の検討がなされている。とくに岩淵の論考は『和歌初学抄』を歌語辞典と捉える視点を提示したもので、日本語学の立場から辞典としての性格を考察する。この性格付けに対して稿者は若干の異見を持つが、重要な見方である。

## 二 『和歌初学抄』の諸本

伝本と分類を確認する。久曾神、川瀬、川上により諸本分類が行われており、特に川上分類が現在の研究水準を示す。

### I 類本

- a イ天理図書館蔵伝藤原為家筆本、同蔵伝二条為氏筆本（天理図書館善本叢書）、志香須文庫蔵本、中央大学図書館蔵  
伝藤原為家筆本（目白大学蔵零本）

口国会図書館蔵本、彰考館蔵本

- b 彰考館蔵金森本、家蔵滋岡庫本、書陵部蔵待需抄本

c イ書陵部蔵谷森本、書陵部蔵梶井宮本

口松平文庫蔵本、祐徳稻荷神社蔵本

### II 類本

- a 冷泉家時雨亭文庫蔵藤原為家筆本、書陵部蔵同上転写本

（日本歌学大系底本）、家蔵聖護院本

b イ鶴見大学蔵本

口寛文二年版本、祐徳稻荷神社蔵一本

諸本は、「秀句」と「物名」の項において、各標目の下に列挙される語句が少なく整然としているI類本と、語句が多く雑然としているII類本とに大別される。（略）

そして、I類本は、書写年代の格段に古いaイが中心で、それとはかなり異なる本文を持つのがbである。a口はaイを底本としてbを対校したものである。cはイ口ともに誤写が多いこともあつて系統を確定し難い伝本を一括したもので、将来の解明を俟つべき点が多いが、いわゆる混態本かと思われる伝本である。

II類本はaが中心で、bのイ口となるにしたがつて、順次末流化したものと考えられる。<sup>★10</sup>

右の分類に影響はないが、付け加えるべきことが二点ある。まず、冷泉家時雨亭文庫蔵本が影印公開され、赤瀬信吾の解題でその性格が明らかにされた。該本は日本歌学大系の底本である書陵部蔵本の親本である。冷泉家時雨亭文庫蔵本の書写年代は鎌倉時代とされ、古写本の多いI類a本系統にも引けをとらず、鎌倉期からI類II類の両系統が存在していたことが証明された。<sup>★11</sup> 彰考館蔵金森本は室町末から江戸初期の書写にかかるようだが、他は江戸期の写本となる。また石澤一志が平成二十二年度和歌文学会大会において目白大学蔵の零本を紹介、鎌倉時代写のI類aイ系統の善本であることを報告した。これにより、I類aイ系統本にさらに古本が発見されたことになる。諸本の書写年代や書誌については川上論文を参照されたい。さて、川上は自身の類基準について次のように述べている。

目に付く特徴を一、二あげれば、I類本は、「嘉応元年七月日  
殿下仰抄出之」の奥書を持ち、一方II類本は「初学抄 清輔  
朝臣撰」の尾題をもつなどの点がある。しかし、異同の中心は、  
「秀句」と「物名」の項において各標目の下に列挙される語句  
の順序と数である。<sup>★12</sup>

川上の分類は基本的に本文異同に依る。だが、諸本は奥書や語句  
順序等の異同のみならず、その書写面にも大きな相違がある。従来  
の文献学的研究は、本文の文字の異同に重点を置き、書写面の様相  
から書物の性質を考えるとといった観点はなかった。

『和歌初学抄』では、各写本の書写面に配置される文字の位置関係、  
すなわち書写面の差異が書物の性質を左右している。諸本で特に書  
写面の差異が甚だしいのは、目次に示される項目と、それらの項目  
の下に配置される下位の項目の表記のなされ方である。上位下位の  
各項目の関係性は一定の構造をもつ。目次と項目の対応や、項目ご  
との配列など、この構造の記述の形式が、書写面の大きな差異となっ  
て現れるのである。大東急記念文庫本『奥義抄』を論じた小稿にお  
いて、こうした目次や項目の順序や配置による内容面における構造  
と書写面の形式との対応を、「情報構造」と称した。<sup>★13</sup> 本稿もこれを踏  
襲する。

### 三 書面遷移——目次との対応——

管見の及ぶ限り、『和歌初学抄』の伝本のすべてには冒頭に目次  
が付されている。目次は概ね「古歌詞、由緒詞、秀句、諷詞、似物、  
必次詞、喩米物、物名、所名、万葉集所名、読習所名、両所歌」と  
記すが、対応する項目の書式は本により大きく異なり、そもそも目  
次と対応する項目見出しが付けられていない伝本すら存在する。以  
下諸本の項目表記を比較することで、どのような現象が起きている  
のかを考察する。なお、書陵部蔵本は待需抄本、谷森本、梶井宮本、  
冷泉家時雨亭部文庫蔵本の転写本があるが、今回は冷泉家時雨亭文  
庫蔵本の転写本のみを扱い書陵部蔵本と呼称する。ここでは「諷詞」  
と「読習所名」の項目表記を例示するが、まずは「諷詞」から確認  
しよう。

「諷詞」

冷泉家時雨亭文庫蔵本（Ⅱ類 a）

書陵部蔵本（Ⅱ類 a）

※版權の都合により、ウェブ版では図版は掲載しておりません。ペーパー版をご利用ください。

天理図書館伝二条為氏筆本（1類 aイ）

中央大学本（1類 aイ）

鶴見大学本（Ⅱ類bイ）

島原図書館松平文庫本（Ⅰ類cロ）

※版権の都合により、ウェブ版では図版は掲載しておりません。ペーパー版をご利用ください。

各伝本は多様な書写面を形成する。「諷詞」の箇所のを簡単に分類してみよう。

- ① 項目見出しが地の文の上部に付けられるもの。(冷泉家時雨亭蔵本と書陵部蔵本)
- ② 項目見出しが存在しないもの。(天理図書館伝為氏筆本)
- ③ 項目見出しは記述されないが、朱点により階層が表記されるもの。(中央大学本、目白大学本、国会図書館本)
- ④ 項目見出しが一行書で統一されるもの。(鶴見大学本)
- ⑤ 項目見出しが簡条書きのもの。(松平文庫本)

③は「諷詞」の項目見出しが存しないものの、項目開始位置の「又」字の上に朱三点(・・)が付けられているこの本は、他に朱一点(・)も確認され、本文に対して朱点が項目の位置および階層を示す目印となっている。他の本もやや異同があるが階層別に朱点をつけることは共通している。

④鶴見大学本は江戸期の写本で、本文研究上さほど重視されるものではない。だが項目位置は前一行を空けて、続く地の文と区別できるように文頭が下げられている。この形式で目次にある全ての項目が規則的に記されている。

⑤松平文庫本は、他の本とは異なる特異な体裁と本文を持つ江戸期の写本である。文献学的には評価の低い本であるが、各項目は簡条書きで書写面の高い位置に記されており、地の文も項目ごとに開

始位置を変えながら写されており、簡条書きの見出しとあいまって階層意識の強い書写面を形成している。

このように並べただけでも、その書写面の多様性が把握できよう。中央大学本と冷泉家時雨亭文庫蔵本はともに鎌倉時代の写と見られる古写本であるが、その書写面は大幅な違いを表している。こうした差異は、各本がある段階で大きく変容した時に起こる現象とは限らない。親子関係にある本にも変容は起こる。冷泉家時雨亭文庫蔵本と書陵部蔵本とを確認しよう。

「読習所名」

冷泉家時雨亭文庫蔵本（Ⅱ類 a）

書陵部蔵本（Ⅱ類 a）

※版權の都合により、ウェブ版では図版は掲載しておりません。ペーパー版をご利用ください。



右に「読習所名」の項目箇所を示した。書陵部蔵本は冷泉家時雨亭文庫蔵本の忠実な転写本のように見える。しかし、冷泉家時雨亭文庫蔵本は前丁から地の文が少しずつ左に下がっていき、「読習所名」項目の直前にある一行分の空白は曖昧となっている。このように左下がりになる箇所は他にほとんどなく、問題を感じさせる箇所である。

一方で、書陵部蔵本は一行の空白が明確に示され、一字下げが明瞭である。「読習所名」項目の開始位置も明確で、親本よりも体裁を整えている。

冷泉家時雨亭文庫蔵本・書陵部蔵本は、ともに、「諷詞」「読習所名」の両項目が同じ形式で書かれており、字詰めや書面の文字配り、平仮名字母の選択も、完全一致ではないが非常に似ている。一見して割付の体裁は変わらないものの、その配置については調整が行われている。全体的に冷泉家時雨亭文庫蔵本のほうが筆勢よく整理された印象があるが、字配りが不明瞭な箇所については明らかに書陵部蔵本が配慮を見せているのである。

こうした現象は、臨模や透き写しといった「複製」の技法では生起し得まい。こうした小さな変容の積み重ねと、より大胆な変容との両方が書写面には起きるのだが、前者の例として親本と転写本との関係が具体的に知る事ができる点、冷泉家時雨亭文庫蔵本と書陵部蔵本との関係は重要である。

#### 四 項目表記と系統分類

以上のように項目表記の差異を取り出してみても、各写本が様々な書写態度で写されたことが理解される。こうした諸本の項目表記の形式について、末尾の表にまとめた。書写面の違いは単純に系統の違いだけではない。系統をまたいで同じ項目表記が現れることもある。

「古歌詞」の項目表記に注意してみたい。すべての伝本を検討するわけではないが特徴的な五本を検討しておこう。

##### ① 天理図書館伝為氏筆本（I類 aイ）

##### ② 中央大学本（I類 aイ）

##### ③ 冷泉家時雨亭文庫蔵本（II類 a）

## ④ 鶴見大学本（Ⅱ類 bイ）

## ⑤ 国会図書館本（一類 aロ）

まず、天理大学蔵伝為氏筆本と中央大学本とは「万葉集」を割注の形で書く。同じ体裁であるが、中央大学本には朱点がある。古写本はこの割注の形式を多くもつようである。さらに、冷泉家時雨亭文庫蔵本も系統を異にするものの、同じ体裁で書かれている。本文系統の差異は必ずしも書写面の差異と一致するわけではないのだ。

続いて、鶴見大学本の形態は、ほかの項目とあわせて改行一字下げがなされている。国会図書館本は末流の伝本だが、「古歌詞」に合点が付され、その上で続く項目をすべて列挙する。

書写年代が下り、良質とは言えない本文を要する鶴見大学本、松平文庫本などが古写本に比べて特異な書写面をもっていることに注意したい。鶴見大学本はすべての項目の位置を揃えて書き記すことで、整った体裁を保ち、規則的で読みやすく書写されている。松平文庫本は簡条書きで項目と同じ文字の高さに「物名」の名などが立項されており、階層が明瞭である。また「古歌詞」がほぼ全文追

い込みで書かれて区切りがなく、あまり重視されていなかったことを想像させるなど、書写の際重視した箇所とそうでなかった箇所があつたことを思わせる。

読みやすい書写面を求めるのは、目次との項目の対応が明記されるⅡ類本だけの特徴ではない。③の形態、項目表記が存しない諸本においては、朱点によって項目箇所を指示している。中央大学本、目白大学本、国会図書館本などには、項目の位置とその項目の階層に朱点が付けられている。

中央大学本では朱点で項目表記がなされ、その朱点には三点と一点とがある。三点は、目次に記される項目に付けられ、一点は、その下位項目に付けられることが多い。目白大学の零本も、おそらくは同じように朱三点と一点とで項目を階層付けていたのであろう。<sup>★14</sup>だが項目表記が明確なⅡ類本には、強いて朱点をつける必要はないであろう。

国会図書館本は奥書に正保五年（一六四八年）の年記が見える江戸前期の書写本である。該本も項目は明記されていないものの、朱合点で目次対応個所の位置を示している。しかし「秀句」の一部である「其国には其所名をそふへし」の箇所に誤って朱合点を付けており、「秀句」の次の項目である「諷詞」の項目開始位置は「又そへよむことは……」であり、この箇所に朱合点は付けられていない。

なお、国会図書館本と同じⅠ類 aロ系統の彰考館本にこの朱合点はない。国会本の朱合点は、正しい項目位置に記されていない個所もあり、Ⅰ類 aイ系統の朱点本と校合の結果付されたものではなく、

後代に付けられたものであろう。こうした国会図書館本の朱合点の誤りは、項目表記のない本に項目を付けることの難しさを示唆している。国会図書館本の存在は、元々項目表記のない本であっても各項目の位置に注意して読まれたことを証拠立てている。

原理的に言えば、鶴見大学本のようにすべての項目表記が一定の形式を保っているのが理想的であり読みやすい形である。また日本歌学大系は項目表記を上部に配置しており、底本に忠実ではないが、鶴見大学本に近い版面となっている。

こうした書写面の変容は、書写者たちが『和歌初学抄』をどのように理解したのかを示している。書写者たちの態度は、親本の体裁を墨守するのではなく、さまざまな利用目的に即応した形に書写面を整えようとしてきた。では、書写者たちは『和歌初学抄』を、どのような書物と理解してきたのだろうか。

## 五 項目表記と読書体験の一致

『和歌初学抄』の内容を、項目表記との関係から述べる場合に重要なのは、文頭に置かれる「又」の語である。『和歌初学抄』の構成について佐藤明浩は次のように述べている。

『和歌初学抄』は、冒頭に総論的と見られている言説があり、以下、第一節に示したような項目編成になつてはいるが、それぞれの項の始めに説明が付されている場合がある。いま、それらを一覽してみよう。

歌をよまむにはまづ題をよく思ひとぎ心うべし。花をよまむには花の面白く覚えむざる事、月を詠ぜんには月のあかず見ゆる心を思ひつづけて、をかくし取りなして、古き詞のやさしからむを選びてなびやかにつづくべき也。

歌詞 — [古い和歌の詞]

由緒詞 — [由緒ある詞]

秀句／又歌は物によせてそへよむやうあり。なぞらへ歌といふにや… — [縁語]

諷詞／又そへよむ事は、声たがひたれども、ただもじにつきてよむなり… — [掛詞]

似物／又物ににせてよむこともあり。それにもせきたる物をもむべき… — [見立て]

必次詞／又さだまりてつづけてよむことあり… — [枕詞]

かくはいへど又つづけぬ事もあり。其証歌等…

喩来物／又むかしよりいひならはしたることあり… — [枕詞]

物名 — [枕詞の例外的用法]

所名 — [事物・事象の種類・異名]

万葉集所名 — [地名]

万葉集所名 — [万葉集歌の地名]

読習所名／又花さかぬのべに花をさかせ、紅葉なき山に紅葉をせさするは歌のならひなれど、ものにしたがひてよみなら

はしたる… — [景物と地名の対応]

両所ヲ詠歌 — [複数の地名を詠む例歌]

最初の一文から、本書が題詠を対象にしたものであることが知られる。この冒頭部分は、普通、総論を示したところと捉えられている。ただし、こうして眺めてみると、総論的部分は「をかしく取りなして」までであり、「古き詞のやさしからむを選びてなびやかにつづくべき也」は「古歌詞」の導入部分とみるべきで、むしろ、「古き言葉の…」は、「秀句」以下にみられる「又…」という部分と並列的に捉えるのが適当であると思われる。<sup>★15</sup>（一部の表記を私に変更した）

佐藤は、「をかしく取りなして、（又）、古き言葉の…」と序文を二つに区切って読むべきと提言、「又」という語により項目が分節されていると指摘した。たしかに、ほとんどすべての写本で「又」は項目位置に重なることが多く、中央大学本をはじめ文頭に配置されている。換言すれば、『和歌初学抄』の項目は、書き出しが「又」で始まる項目と、項目名が見出しとなる項目とによって成り立っているのであり。前者は、項目について説明がある「秀句」「諷詞」などがこれに当たる。いっぽう後者は、歌語辞典的な性格をもつ「古歌詞」「由緒詞」「物名」など語句や例歌が列記される項目で、各項目には多数の羅列的な下位項目を持ち、検索性の観点からも『和歌初学抄』の辞書の項目といえる。

逆に言えば、『和歌初学抄』で説明が必要な項目とは、辞書的な性格が弱い個所である。「又」と書き出される項目は、「秀句」、「諷詞」「似物」「必次詞」「喩来物」など和歌の比喩表現を扱う連続した一群に集中的に見え、「読習所名」で再見される。I類aイ本系

統の古写本において、項目表記が見えない箇所と「又」で始まる項目とはほぼ一致しており、この一群では「又」が見出しの代わりとなっている。

ここで想起されるのは、初学者向け歌学書としての『俊頼髓脳』である。話題の別による項目立てや目次を一切持たない『俊頼髓脳』の構造と、『和歌初学抄』の「又」により分節される一群は、前話を引き継ぎながら進む性質が共通するのではないか。項目立てや目次がない書物は、話題ごとに読む個所を区切ることができても、検索性を付与することは難しい。こうしたタイプの構造は、たとえば物語や随筆といった、項目や話題の分割をもたないジャンルの作品に見られるものである。このような分割される構造をもたない書を「読本」と称しておきたい。歌学書においても、後述するような『俊頼髓脳』や、多くの和歌を例示し歌病などにも触れるものの、それらを立項しない『古来風躰抄』のような書物も、読本的な書物であると見做すことができる。

『和歌初学抄』は、「又」で繫辞する文章構造をもつ項目と、語彙や例歌を列挙する項目とにより、歌語辞典と読本というふたつの性格を有している。それらを、目次に記すような和歌の項目の集積として整理した書物だといえる。辞典的な部分とはかく、和歌の修辭技法に関する項目はどれか一つだけ習得したとしてもほとんど意味がないものだろう。最初から最後まで読み通す必要がある箇所だ。

I類aイ系統に代表される項目表記を欠く諸本は、全体として読本的性格を強く持つ本と言えるだろう。項目立てが明確に配置され

た、書写年代の新しい諸本は、目次と項目とを完全に一致させることで、階層関係が明瞭で、辞書的な利用が可能な本として書写されているのである。推測に過ぎないが、中央大学本等の項目開始位置に付される朱点は、このような「読本」的な性格の本文の書写面を維持したまま、項目ごとの検索を容易にするべく工夫した本なのである。

書写者は、『和歌初学抄』の項目階層や利用目的から、読本と辞書という二つの性格のどちらを強く押し出すかを考えたのであろう。読本的な書写態度（項目の標示を徹底しない）と、歌語辞典的な書写態度（項目が明示される）とを生み、さまざまな書写面を形成していったのである。

ここで重要なのは、こうした「読本」と「辞書」の性格は、書写面の変容によって初めて表れたものではなく、「又」で項目を区切りながら、それぞれの項目ごとに異なる規則性をもつ『和歌初学抄』の内容的な性質自体に存在するものである。

## 六 享受と利用——辞書と読本——

ここでは、実際に『和歌初学抄』に読本と辞書という二様の性格付けがあったことをまず論じたい。『和歌初学抄』を引用する歌学書類の記述を列挙する。

### A 『五代集歌枕』

（黒田彰子編『五代集歌枕』みずほ出版、二〇〇六）

くしかは 久慈―常陸

万廿 くしかは、さけくありまでしほふねに

まかちし、ぬきわはかへりこむ

之自奴偽伎

\* 歌番号・二三七一 出典・万二十、四三六八。

歌下部余白に「為常州之由見初学抄か／三本無之予書

入之」とあり。

### B 『和歌色葉』（歌学大系）

五代集の難義はちかごろの奥儀抄、初学等にみえたるを、これに存略を加えて最要をいださば……

### C 『夜の鶴』（歌学大系）

初学抄と申て、清輔朝臣のかきをかれ候ものにも、哥をよまむには、まつ題の心をよく心うへしと候とおほえ候。

### D 『色葉和難集』（歌学大系）

一、おしてるや

古 おしてるやなにはのうらに焼く塩のからくもわれはお

ひにけるかな

初学抄云、おしてるやとはしほうみをいふなり云々。にほてるとはみずうみをいふなり。

### E 『了俊一子伝』（歌学大系）

一、三代集の歌の外に、つねに可披見抄物事。三十六人の家集等、伊勢物語、清少納言枕草子、源氏物語等也。これらは歌心の必々付物也。又は詞のため稽古には初学抄、俊

類髓脳、頭註密勘、一字抄など也。

F 『溪雲問答』（歌学大系）

初学抄に歌を詠まんには、先題をよく思ひ解き得べしと有り。（中略）三書にいへるごとく、題を心に得る事もかたかるべし。

以上の範囲からも、歌の難義に対する論拠として引用されるか、題詠歌を詠む手引書として読まれるかという、二様の読まれ方が存したことが確認できる。題詠歌を詠ずる手引として読むならば、修辭技法を中心とする一群の記事をもつ『和歌初学抄』は、最初から全て読み通さなければ意味がないものであろう。一方、BやEの例のように、和歌の難義や、証歌の存在を示す書として利用するならば、個別の項目へめぐり飛ばすことができたほうがよいだろう。

もちろん、辞書か読み物か択一的に読まれ方が規定されていたわけではない。題の心をよく心得ることを記す書として読むにせよ、「詞のため稽古」に読むにせよ、難義の証として読むにせよ、それが峻別されていたわけではない。各項目へ飛びやすい構造を持つている本も頭から読むことはできる。また、『和歌色葉』のように証拠能力をもつ辞書として読まれてきたことは、辞書としての利用が行われていたことを裏付けてもいる。

七 おわりに

現在残される『和歌初学抄』の諸伝本は、その本文だけではなく、体裁や割付も多様に異なっている。最古写とみられる冷泉家時雨亭文庫蔵本と天理大学本との間にすら差異は認められ、時代が下るにつれて、鶴見大学本や松平文庫本、国会図書館本のように多様な書写面が現れていく。書写面の差異は、忠実な転写関係にある冷泉家時雨亭文庫蔵本と書陵部蔵本との間にすら生起している。鶴見大学本や松平文庫本等は、利用目的により適合する体裁へ変容している。このように多様な書写面が生成するのは、『和歌初学抄』のような雑多な内容を包括する歌学書に特徴的な現象である。つまり、内容を整理する構造や、項目の記述の体裁などが多様であり、複数の項目が立ち、その項目ごとの記述の形式が異なっている書物に起こる現象である。

『和歌初学抄』は、項目ごとに体裁が異なり、項目と下位項目および地の文との関係も複雑である。つまり書写者が書写面をデザインする余地が大きい書物といえる。歌学書を連続する文字列としてではなく、情報のまとまりとして捉え、その設計から、書写や享受による受容と改変まで視野に入れ、考察することは不可能だろうか。

伝本が少ない歌学書では、書写面の変容が「いつの段階で」始まったのかを具体的に特定することはできないが、すでに冷泉家時雨亭文庫蔵本と書陵部蔵本との関係において、より合理的な書写面を形

成していく様相が観察できたように、完璧な臨模本でない限り、書写は必ず親本と異なった部分を生じてしまうのである。

もちろん書写面への興味は院政期の頃から著者自身にも存在している場合があった。天叡地単の罫線をもち情報の割り付けに非常に注意を払う国立歴史民俗博物館本および冷泉家時雨亭文庫蔵本の『袖中抄』など、書写面へのこだわりは院政期の歌学書が成立した時点においても看取されよう。<sup>★17</sup>

しかし、享受の観点から書写面の設計に注意すると、一書がどのように理解され改変されたのかを、本文の異同とは異なる側面からは考察できるのである。書写面の変容は、具体的にいつどのように起こったのかを解明するのは困難だが、形態の多様性はそのまま諸本の性格を伝えてくれるだろう。

書写面を構築する行為は書写者が本文の情報構造を確定する作業に他ならない。そこから生まれる情報構造の解釈は一様ではなく、多様な書写面が生成される。諸本の比較によって判明するのは、書写面の変容とはまったく野放図かつ無作為な現象ではなく、諸本がどのように解釈されてきたのかを示す指標にもなりうるということなのだ。どのような変容が起こりやすく、どのような箇所が変化しにくいのか。それは書写者がどのように読み、どのように解釈したかの〈歴史〉なのである。

親本の書式がわからないものもあるため、すべての変容可能性の実証は困難である。だが、現存している諸本のあり方それ自体が享受の様相の多様さを示しているのならば、それもまた、本文の「播

れ」などと同じく享受の変容幅として考えることができるのではないだろうか。

むしろ、善本の調査と評価は重要な課題である。一方で、書写展変によって諸本が変わるならば、その変容自体も重要な享受の側面なのである。このような本のデザインに関することは、奥書や外徴によって知られる「事実」ではないかもしれない。しかし、諸本は、私たちが知ることでできない書写者たちの解釈の蓄積なのである。ここに目を向けることで、今現在に残された本がどのような性質のものであったかを、内容のみからの把握とは異なった角度から明らかにすることができるだろう。

歌学書と書写面との関係は一様ではない。本稿はその関係の解明の試みの一つである。

## ■ 『和歌初学抄』 諸本の項目配置

諸本	項目		由緒詞	秀句	風詞	似物	必次詞	施来物	物名	所名	万葉所名	読置所名	画所名
	古歌詞	萬葉集											
天理大学蔵本 (Ia1)	表記の有無	〇	〇	×	×	×	×	×	〇	〇	〇	×	〇
	記置位置	改行	改行	一行空・改行	改丁	一行空・改行	改行	改行	一行空・改行	一行空・改行	一行空・改行	改行	一行空・改行
中央大学蔵本 (Ia1r)	表記の有無	〇	〇	×	×	×	×	×	〇	欠落	〇	×	〇
	記置位置	一朱点	一朱点・一行空・改行	三朱点・一行三朱点	三朱点	三朱点	三朱点	三朱点	三朱点・改行・一行空	欠落	三朱点・一行空・改行	三朱点	三朱点・一行空
彰考館蔵本 (Ia1d)	表記の有無	〇	〇	×	×	×	×	×	〇	〇	〇	×	〇
	記置位置	改行	改行	改行	改行	改行	改行	改行	改行	改行	改行	改行	改丁・改行・一行空
彰考館蔵金澤本 (Ib)	表記の有無	〇	〇	×	×	×	×	×	〇	〇	〇	×	〇
	記置位置	改丁	一行空・改行	改行	改行	改行	改行	改行	改丁	改行	改行	改行	一行空・改行
冷泉家時雨亭文庫蔵本 (IIa)	表記の有無	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	記置位置	改行	改丁・改行	頭書	改行	改行	改行	改丁・改行	改丁・改行	改行	改丁・改行	頭書・改行	一行空・改行
書院部蔵本 (IIa)	表記の有無	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	記置位置	改行	改丁・改行	頭書	頭書	一行空・改行	改行	改丁・改行	改丁・改行	改行	改丁・改行	頭書・改行	改行
龍泉大 (IIb-r)	表記の有無	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	記置位置	一行空・改行	一行空・改行	一行空・改行	一行空・改行	一行空・改行	一行空・改行	一行空・改行	一行空・改行	一行空・改行	一行空・改行	一行空・改行	一行空・改行
祐徳稲荷神社 (IIb1)	表記の有無	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	記置位置	一行空け・改行	一行空・改行	改行	改行	改行	改行	改丁・改行	改丁・改行	改行	改丁・改行	改丁・改行	改丁・改行・一行空
祐徳稲荷神社蔵本 (Ic1)	表記の有無	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	記置位置	改行	題条	題条	題条	題条	題条	題条	題条	題条	題条	題条	題条
松平文庫蔵本 (Ic1)	表記の有無	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	記置位置	改行	題条	題条	題条	題条	題条	題条	題条	題条	題条	題条	題条



【付記】

本研究は平成二二年度和歌文学会十一月例会の口頭発表表に基づいて成稿した。席上多くの先生方からご指摘賜りましたことを厚く御礼申し上げる。また本稿掲載の画像は、冷泉家時雨亭文庫蔵本は『冷泉家時雨亭叢書 和歌初学抄 口伝和歌釈抄』（朝日新聞社、二〇〇五）、天理図書館蔵伝為氏筆本は『天理図書館善本叢書 平安歌論集』（天理大学出版部、一九七七）、松平文庫本は木村晟編『和歌初学抄 翻字本文・用語索引 附載 影印本文』（大空社、一九九七）の影印をそれぞれ利用し、その他は国文学研究資料館・国立国会図書館から提供された紙焼写真を利用した。閲覧と図版掲載の許可を下さった関係各機関に深謝申し上げます。本研究は平成二二～二四年度日本学術振興会特別研究員奨励費の成果である。

【註】

- ★1 川上新一郎『和歌初学抄』伝本考（『慶応義塾大学付属研究所 斯道文庫論集』第一輯、一九八三・三）↓同『六条藤家歌学の研究』（汲古書院、一九九九）。
- ★2 佐佐木信編『日本歌学大系 第二巻』（風間書房、一九七二）解題。
- ★3 川瀬一馬『古辞書の研究』（大日本雄弁会講談社、一九五五）。
- ★4 小林強「中世古筆切点描——架蔵資料の紹介（二）——」（大取一馬編『龍谷大学仏教文化研究叢書九 中古中世和歌文学論集』思文閣出版、一九九八）。
- ★5 日比野浩信『和歌初学抄』の古筆切（『愛知淑徳大学国語国文』第一九号、一九九六・三）。
- ★6 渡部泰明「院政期の縁語の位相——藤原清輔『和歌初学抄』の秀句をめぐる——」（『上智大学国文科紀要』第一一号、一九九四・三）。
- ★7 佐藤明浩『和歌初学抄』物名「稻」の窓から（『講座平安文学論究』第一五輯、風間書房、二〇〇一）。
- ★8 田尻嘉信「読習所名」私注（『文化報』二二、跡見学園女子大学 短期大学部文科国文専攻、一九九六・三）。
- ★9 岩淵匡「和歌初学抄（由緒詞）における語彙」（早稲田大学 教育学部『学術研究人文科学・社会科学学篇』第一五号、一九六六・二）。
- ★10 川上前掲書。
- ★11 『冷泉家時雨亭叢書 和歌初学抄 口伝和歌釈抄』（朝日新聞社、二〇〇五）。
- ★12 川上前掲書。
- ★13 梅田径「大東急記念文庫本『奥義抄』の情報構造——歌学書の割付を中心に」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊』五六輯、二〇一〇・二）。
- ★14 石澤一志の教示による。目白大学本は卷子本に改装した折、丁の順番をやや入れ替えている都合で、項目表記の「萬葉集所名」の箇所をすり消した後があり、そこに朱点が薄く確認できる。
- ★15 佐藤前掲論文。一部私に表記を変更した。
- ★16 このような性質の書物としては『俊頼髓脳』が参考になる。『俊頼髓脳』のように項目分割のない書を辞書のように検索して使うのは、不可能ではないにせよ骨が折れる作業であるが、頭から読

み通すかぎりは項目立てによる内容の分節は不要である。一方で『俊頼口伝集』の書名をもつ。

★17 冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書 袖中抄』（朝日新聞社、

二〇〇三）、橋本不美男、後藤祥子『袖中抄 校本と研究』（笠間書院、一九八五）。

うめだ・けい（早稲田大学大学院文学研究科・日本学術振興会特別研究員DC2）